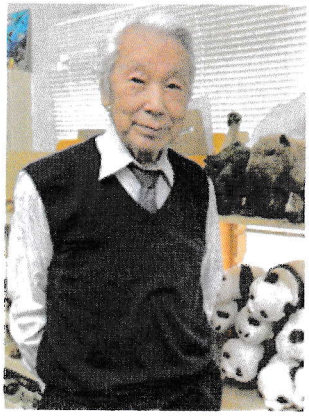
⚙モノづくりを考える! 第50回

環境変化から新製品を生み育てる

株式会社ヤマサン 東大阪市荒川3丁目11-2



肩にリスザルを乗せる松田さん



宮本社長、後ろの棚にはパンダ、マヌルネコのANI・PALと追加アイテムのカワウソ、カピバラ等が並ぶ

宮本順一朗氏は、自社オリジナル商品の開発と新規販売ルートの開拓を進めるために、㈱ヤマサンを1972年に設立した。前身は、父・順三氏がオマケ担当として勤務していた江崎グリコ㈱を退職して1952年に設立した山三化学工業㈱である。1952年から1972年までの20年間の環境変化(労働ストライキによる工場閉鎖、少子化による景品玩具の受注減、香港を中心とする海外生産への移行)をうけて、生産メーカーとしての山三化学工業㈱と別組織の問屋販売の立場で㈱ヤマサンを立ち上げた。

恐竜グッズ(イタリア・ジオワールド社)の国内販売を約30年前に始めてから、福井の恐竜新種発掘があり、博物館が開館、その前の映画ジュラシックパークの大ヒットから恐竜ブームとなって自社オリジナル商品(恐竜フィギュア)を制作販売して国立博物館等各地で受注を増やすことができた。

2020年2月からのコロナ禍に博物館のイベントが激減して従来の製品出荷額が減少した。そんななか売上が落ちていなかったのが「ぬいぐるみ」業界であったので松田晴奈氏はそこに着目した。「ぬいぐるみ」の今までにないものを考えた。口と足が動く恐竜フィギュアの経験を活かし体内に骨格を入れて体形を変えられるようにした動く絶滅危惧種の「ぬいぐるみ」を開発。自由に動かせることによって人間との心の繋がりが生まれてほしいという願いが込められている。

ANI・PALのブランドで発売して大阪・関西万博に出展。今年2月の東京ギフトショーにも出展し「monoマガジン」社の取材を受け、4月の特集号にキダルト商品として取り上げられた。発売から1年余りを経過して追加アイテムを開発中。その様子を語る宮本社長は動物にも人にも優しいまなざしを向けている。

公式WEBサイト